

1 グループ研修

①-1 「幼保小の懸け橋プログラム」を活用した幼小接続の工夫

1 協議内容

- ・ 幼稚園から小学校へのアプローチや教育の連続性をまとめた。子供の発達や学びの連続性を踏まえた教育のつながりを理解するために、意図的に小学校を知る意識が大切である。
- ・ 小学校と合同研修を実施した。スタートカリキュラムについては、小学校の先生方の必要性への理解が深まりつつある。さらに共通認識をもてるようにしていきたい。
- ・ 小学校は、何十という幼稚園・保育園から子供が入ってくる。どのように小学校とつながっていくかが課題で、幼稚園と小学校とが一緒にできる行事をピックアップしている。
- ・ 遊びを通していろいろなものの見方や考え方の資質を育む活動や、先行体験を通して小学校生活へのスムーズな接続を図る活動を取り入れている。
- ・ 幼小の教育がどうつながっていくか10の事例をまとめた。互いの教育の特性を理解し、小学校との円滑な接続を図っていくようにする。
- ・ 幼稚園は、遊びや生活を通して資質・能力を育てていく中で、子供が自分たちで解決できる思考力に重点を置いている。
- ・ いろいろな場で自分の感想を発表させるなどして、自分を表現できる子を目指している。

①-2 「幼保小の懸け橋プログラム」を活用した幼小接続の工夫

1 協議内容

(1) 幼小接続にかかわる各園の取組

- ・ 小学校の様子を知るために就学時健診に幼稚園職員が参加した。
- ・ 学期ごとのテーマに沿って小学校との交流をする機会を設けた。
- ・ 次年度教育課程編成の早い段階で、小学校と情報交換をする必要がある。

(2) 今後に向けて

- ・ 年度の早い段階での小学校職員と幼稚園職員との顔合わせの場を設定したい。
- ・ 双方にとってメリットのある交流とするための内容を工夫する必要がある。

(3) まとめ

- ・ 幼稚園、小学校ともに負担の少ない内容での実施が継続のカギである。
- ・ 幼・小の職員同士の良好な関係性の構築が何よりも大切である。

## ②-1 つながりのある発達支援教育の推進

### 1 協議内容

- ・ 就学指導について、幼稚園、保護者の希望と違う場合がある。判断の基準が分かりづらいが、判定が出た以上、就学に向けて幼稚園で出来ることを準備していくことが大切になる。地元で育っていくのが望ましく、知的、情緒の発達支援級の両方がどの小学校にもあるとよい。
- ・ 愛着障がいと、発達障がいの違いについて、情報交換を行った。
- ・ 幼稚園から小学校へのつながりについて、活動や研修の事例を挙げた。見通しをもち系統立てた支援方法を知ることができた。
- ・ 「はますくファイル」の、各年齢の発育・発達のページは、発達支援の判断にもなるため保護者と話す機会（個人面談・懇談会など）に活用できるとよい。
- ・ 今後の公立幼稚園の在り方として、発達支援のためのスペシャリストを育成するとよいのではないか。そのために、人材育成の体制、研修が大切であるなどの情報交換を行った。

## ②-2 つながりのある発達支援教育の推進

### 1 協議内容

- ・ 支援を必要とする園児に対して園としては声掛けの仕方や環境設定、職員の配置等において様々な工夫をすることが必要であり、それによって成果が得られた事例が多々ある。
- ・ 就学支援においては、現在のことだけでなく将来的な展望を持って保護者へ話をするのが大切である。そのためには園長として就学に関する様々な情報を得ておく必要がある。
- ・ 発達の課題が改善された後でも医療機関、療育機関との連携は大切にしておきたい。

### 2 その他

- ・ 幼稚園経験の長い園長、学校経験のある園長等が同じテーブルで話し合いをすることで、様々な情報交換ができ大変有意義な研修を行うことができた。

## ③-1 安心・安全な園経営のための危機管理能力の向上

### 1 協議内容

#### (1) 「ヒヤリハット報告書」を各園で活用しての成果について

- ・ 前回に続き「ヒヤリハット報告書」を各園で作成し、事案に対しての考え方や対応方法について情報交換を行った。様々な対応方法が示され参考になった。
- ・ 各園の事例を知ることによって自園でも起こりうる事として受け止め、危機管理意識を高める機会になった。

#### (2) 熱中症対策、感染症対策等に対する園長のリスクマネジメントについて

- ・ 職員のコンプライアンス（法令遵守）に対する意識を改善していかないといけない。園長が法的根拠を学び、それを職員に示し指導していくことが大切である。
- ・ 保護者の理解を得ることや説明の仕方もコンプライアンスに基づいた適切な対応が大切である。

### 2 研修を振り返って

- ・ 各園で「ヒヤリハット報告書」を実践し、事例をあげながら話し合いをした事で、危機管理に対する学びが深まった。
- ・ 危機管理やコンプライアンスはすべての園長が共有すべきものなので、研究部だけにとどまらず、全体で学ぶ機会が増えるとよい。

### ③-2 安心・安全な園経営のための危機管理能力の向上

#### 1 協議内容

- (1) 自然災害への取組について（地震・火災・津波・大雨、以外）
    - ・ 中山間地域の園では、熊、鹿、猿、蜂の被害が話題になっている。これらの課題にも対応できるよう地域住民や専門家から情報を得ていくことが大切である。
  - (2) 危機管理について
    - ・ 園の災害特性を理解し、様々な想定で避難訓練の実施をしている。
    - ・ 備蓄品の置き場所や内容、運搬方法について改善した。
    - ・ 園児減少に伴い、職員数が減っている。マニュアルに即して対応するための人員数が不足する場合も想定され、災害対策の組織と内容に対応できるのか検討が必要である。
- 2 次年度の研修について
- ・ 教職員の危機管理意識を高め、起こり得る災害を想定し、幼児の発達に応じた身を守るための意識や行動力を育てることや、保護者や地域、関係諸機関との連携・協力体制づくりについて学んでいきたい。

### ④-1 小規模園における幼児教育の充実に向けた園経営の工夫

#### 1 協議内容

- (1) 運動会のあり方について
  - ・ 各園の実情に合わせて、運動会を実施した。
  - ・ 今後の生活発表会や来年度の運動会も、各園の園児数や園児の姿に応じて実施の仕方を考えていく。
- (2) 各園の行事の課題や取組について
  - ・ 行事の実施の仕方について保護者の要望もあるが、子供の姿を伝えながら園の実施の仕方を伝えていくことが大切である。
  - ・ 行事を実施するための活動とならないよう、子供の姿や思いを受け止めながら、行事の方法を考えたり、進めたりしていきたい。

### ④-2 小規模園における幼児教育の充実に向けた園経営の工夫

#### 1 協議内容

- (1) 運動会について
  - ・ 小学校との合同運動会や幼稚園単独、また近隣園と合同で行った。
  - ・ 行事のために練習を重ねなくても、日頃の遊びを競技とすることで子供たちが負担なく取り組めた。また、人数が少なくなり、出来ない競技も出てきた。それを補う形として、地域の方、卒園児、未就園児、小学生に協力をお願いしたところ、参加者の一体感につながるなどの効果もあった。
- (2) 生活発表会について
  - ・ 複式学級で年中・年長児が合同で取り組むという形にとらわれず、子供の実態に合わせて年中児を年少児と組み合わせるなどして工夫している。
  - ・ 小学校と合同で開催している園では、幼稚園の子供たちが場を和ませたり、温かい雰囲気を出したりするので、地域から期待されている面もある。
  - ・ 各学年のねらいをもち、学年の逆転が生じないよう留意する必要がある。何よりも子供の生き生きとした姿が、保護者の信頼を得ることにつながっていく。